

まえがき

今、ロシアはいったいどこへ行こうとしているのでしょうか？ 日本の隣の国であるだけに、ちょっと気になるところです。

先日、新聞にシベリア鉄道についての話が載っていました。ロシアで今、サハリンとシベリア大陸とをへだてるタタール海峡の下を、トンネルで結ぼうという計画がもちあがっているということです。もしそういう話があるのなら、サハリンと北海道の宗谷岬を結ぶ、宗谷海峡トンネルも夢ではないかもしれません。シベリアと日本とが直接結ばれば、経済的波及効果が莫大なものになるはずだからです。宗谷海峡の幅は、青函トンネルで十分つなぐことのできる距離ですから、技術的にはなんの問題もなく、またトンネル以外に架橋構想もあるということです。

経済効果の方は私にはよくわかりませんが、もし、タタール海峡にトンネルができ、宗谷海峡にもトンネルができれば、東京とモスクワやパリやロンドンとが陸続きになることはわかります。そうなると、東京駅のプラットフォームに、モスクワ経由パリ・ロンドン行きの列車が発着するなんてことも、夢ではないということになります。今この列車に乗れば、2週間後にはロンドンに到着しているんだと想像しただけでも、何かわくわくしてきませんか？

とにかく、ロシアは日本の隣の国ですから、重要な問題も未来への夢も、いろいろな意味で共有しているということです。

この原稿を書いているとき、親戚の高校生の娘が、モスクワにあるポリショイパレエ学校に3カ月間、パレエの勉強に行ってきますのでよろしく、といってきました。こうしたニュースはうれしいものです。民間レベルの文化交流もとても大切で、日本人とロシア人がたがいにさまざまな面で理解を深め、信じあえる関係に少しでも近づけることを願うばかりです。本書で、ロシア語の知識とともにロシアの文化を紹介する点に力を入れているのもそういう意味を込めているからです。

ぜひ皆さんも、この本を読んだら、ロシアへ行って、自分の目で本当のロシアを見てきてほしいと思います。

最後に、本書の作成にご協力いただいた、守屋愛さん、東井ナジェージュさん、オリガ・ワシーリエヴァさん、そして三省堂の松田徹氏に深く感謝いたします。

2000年9月

金田一 真澄

本書の使い方

本書の特徴と使い方について注意してほしい点は、以下のとおりです。

(1) 本書は、ひとりでロシア語の初歩を学ぶための自習書として、各課6～8ページだてで編纂されていますが、解答のない練習問題を別に用意すれば、教科書としても使用できます。

(2) ロシア語テキストには、できるだけカタカナで読み方を表記しました。ロシア語は日本語と発音の面で似た性質があり、カタカナ表記が有効であると考えたからです。

さらに、付録のCDを利用して、ロシア人の吹き込んだ発音をよく聴いて下さい。何度も繰り返し聴いて、耳をならすことが大切です。

(3) テキストでは、ストーリー性を重視し、日本人学生のタクヤ君のモスクワへの旅と、ロシア人女性オーリャとの出会いと別れが、30課にわたって描かれています。

(4) テキストは、実用的な会話を中心に編まれています。皆さんがロシアに旅行に行くことがあれば、きっと役に立つと思います。

(5) サブテキストは、テキストで触れることのできなかった会話表現や文法事項を補足する内容が盛り込まれています。

(6) 文法説明はかなりいいえにしましたが、たりない分は、さらに巻末の《附表》で補っていますので、そちらもまめに開いて見て下さい。

(7) ロシア語の名詞や形容詞の語尾変化は、複雑で難しいといわれますが、基本型を一括して記憶してしまうのが、賢いやり方です。ぜひ《附表》の「覚え方」にならって、ロシア語の変化を自分のものにして下さい。

(8) 「ロシアへ行こう！」では、ロシアの最近の事情や文化について、さまざまなトピックスを紹介しています。これらの内容は、各課のテキストで触れたものをとりあげています。写真を見ながらちょっと一休みして下さい。

(9) 「練習問題」には、難しいものもあるかと思います。その場合は、答えを先に見て、内容を理解してから、再度やり直してみてください。

(10) 巻末の「単語集」からもわかるように、テキスト、サブテキストで使用されている語彙は、全部で500ワード程度です。